福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

「羅生門」の九種の漢訳文をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 海 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8673

「羅生門」の九種の漢訳文をめぐって

南　　海*

（2014年9月25日　受付）

キーワード：羅生門、漢訳、訳者、信達雅

1. 問題と目的

芥川の代表作品「羅生門」は日本では永遠の名作で、戦後の学校教科書に於いて「定番」教材としてよく採用されていた。それのみならず、一衣帯水の中国に於いても、「羅生門」が1921年魯迅の手によって漢訳され以来、2012年までの約九十年間、絶えず漢訳され、正式出版された回数はなんと九回にも達しており、外国短編小説の内、単一作品としての漢訳回数が最も多いと言われている。洋文漢訳界に於いて、チェーホフの「カメレオン」やモーパッサンの「脂肪の塊」にしても、その漢訳回数がこれまでそれぞれ三回と四回となっている。和文漢訳界に於いて「短編小説」の漢訳回数が二回以上の作品を並べると、「伊豆の踊り子」（川端康成）、「雪国」（川端康成）、「春琴抄」（谷崎潤一郎）、「蒲団」（田山花袋）、「潮騒」（三島由紀夫）、「蟹工船」（小林多喜二）、「坊ちゃん」（夏目漱石）の計七作品がいずれも三回、「吾輩は猫である」（夏目漱石）が二回、異なる訳者に漢訳、出版されたのである。芥川短編作品の漢訳に関してはいずれも上述した作品を上回り、その内の「羅生門」は更に知名度が高いが故にその漢訳は正に「百花斉放、百家争鳴」の態を呈していて、最早「異常」なまで漢訳が為されてきたとも感じられる。

同じ内容の、異なる訳者の九種類の訳文自体が芥川文学の魅力を肯定し、中国の読者に読ませたいというのは当然考えられるが、九人もの訳者が同一内容に対し、これほど執着し、先輩者の漢訳を受け継ぎ、何らかの影響を受けたものの、自らの手で新たに漢訳に挑戦してみようとは何を意味しているのか、又そうした漢訳が相互に果たしてどれほどの相違があるのかなどの問題を本論文で究明していきたいと思う。

「羅生門」の創作風格や作者の創作意図など原文に関する論文が中国国内に於いて百単位で計算するほど存在するが、「羅生門」の漢訳文をめぐる論文は十指で数えられるほどのもので、ほと

*福井大学教育地域科学部人間文化講座

んど研究されていない。その何本かの論文にしても、特定の一人の訳者の訳出方や、せいぜい四人の異なる訳者の訳出方について比較しながら論じたりはされているが、本稿までに全訳者の訳文を対象とした論文はまだ見当たらず、とても九種の訳文という「異常」なまで発展した「羅生門」の訳文全体の解明には至っていない。九種類の訳文が存在する以上、相互に何らかの関係性があるわけで、それを究明するのが本稿の目的である。

2. 方法

ここで分析の対象となる九人もの訳者の経歴が気になる。そこで著名人魯迅以外の八人について簡略に紹介する。

1. 楼適夷：中国現代作家、翻訳家、人民文学出版社副社長、副編集長。
2. 呂元明：東北師範大学外国文学研究室主任、全国日本文学研究会副会長。中国作家協会会員。
3. 聶双武：湖南人民出版社辞書文史読物編集部副編集長。
4. 文潔若：人民文学出版社編集者、日本文学研究会理事、中国翻訳協会会員。中国作家協会会員。
5. 魏大海：中国社会科学院外国文学研究所東方文学研究室研究員、中国日本文学研究会秘書長、日本川端康成文学研究会海外会員。
6. 林少華：中国海洋大学外国語学院教授、著名翻訳家。
7. 傅羽弘：吉林大学教授、吉林省翻訳学会会員。
8. 高慧勤：中国社会科学院外国文学研究所研究員、中国日本文学研究会会長、中国作家協会会員。

次に、分析の対象とする「羅生門」の九つの漢訳本は以下のとおりである。

	訳者名	出版物	出版社	出版時間
1	魯　迅	『現代日本小説集』	上海商務印書館	1923年6月
2	楼適夷	『芥川龍之介小説十一篇』	湖南人民出版社	1980年7月
3	呂元明	『芥川龍之介小説選』	人民文学出版社	1981年11月
4	聶双武	『芥川龍之介短編小説選』	湖南文芸出版社	1998年12月
5	文潔若	『羅生門』	華夏出版社	2003年12月
6	魏大海	『芥川龍之介全集』	山東文芸出版社	2005年3月
7	林少華	『羅生門』	上海訳文出版社	2008年7月
8	傅羽弘	『羅生門』	吉林大学出版社	2009年8月
9	高慧勤	『芥川龍之介短編小説選』	漓江出版社	2012年6月

以上の各「羅生門」の訳文について、本文より随意に抽出した五箇所を、原文と対照しつつ、魯訳、楼訳のように略称をつけ、相互に対比を行い、各々が如何に訳されているかを比較しつつ、分析してみる。

3. 考察と分析

いわゆる翻訳批評とは「具体的な翻訳作品又は翻訳作品にかかわりのある翻訳現象に対し行われる評論」のことで、翻訳作品に対する鑑賞であり、また翻訳ミスへの指摘批評でもある。更に論理的な研究でもあり、ある翻訳現象を評することによりそこにある問題を説明するものである。翻訳批評の対象と言えば、訳者、翻訳、翻訳過程、翻訳作品の質と価値及びその影響などが含まれている。翻訳批評の目的は「翻訳の質を向上させ、翻訳教育のための実例を提供し、特定時期の特定領域に於ける翻訳観念を解明し、作家及び訳者への理解に役立ち、原語と訳語との語義や文法上の差異への比較」など、実に多目的である。異なる訳本の差異性に対する系統的な対比が更に翻訳者に翻訳学の理論をより深く認識させ、翻訳活動の本質に対する認識を深めさせられる。ここでは、具体的に原文と対照しながら、訳文について見てみる。

原文1：一人の下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。（P7）

魯訳：有一个家将，在罗生门下待着雨住。（P233）

楼訳：有一家将，在罗生门下避雨。（P1）

呂訳：站在罗生门下的仆人等着雨住下来。（P9）

聶訳：一个仆人正站在罗生门下等着雨停下来。（P1）

文訳：有个仆人在罗生门下等待雨住。（P12）

魏訳：一个仆人至罗生门下避雨。（P29）

林訳：罗生门下，一个仆人正在等待雨的过去。（P1）

傅訳：一个佃农在罗生门下避雨。（P3）

高訳：一名家丁在罗生门下面避雨。（P001）

この「羅生門」の冒頭では、「下人」と「雨やみを待つ」の二箇所が注目すべきポイントで、先ず、「下人」に対し、九人の訳者のうち、二人が「家将」、五人が「仆人」、それぞれひとりずつが「佃农」と「家丁」と訳している。そもそも「下人」という語は平安時代以後、荘官や地頭などに隷属して雑役に従事した者又は雑人のことで、「家将」という中国語の「所謂一家の首領又は家長、旧時富豪官僚家に雇用された武装の僕人」にはほとんど当たらない。よって「家将」の訳語は誤訳と見たほうがいい。一方の「佃农」も通常、「封建地主制度に於いて地主の土地を借り入れて耕し、生活する農民」のことで平安朝の「下人」にも当たらないので、誤訳である。「家丁」とは「旧時富豪家守護家院等仆役」に当たる人で、「下人」に相応しい訳である。また、「仆人」も「雇われて家庭中の雑事に従事する人」であるため、正確な訳語と言える。「雨やみを待つ」の部分に関して、大体「避雨」と「等待雨住」という二通りの訳し方が伺える。「等待雨住」、「等待雨停」、「等待雨的過去」など魯迅訳をはじめとして、呂訳、聶訳、文訳と林訳の五訳者はいずれも原文の構造に忠実しすぎているがゆえに、中国語の表現法には合わなくなる。それより後の四訳者の「避雨」の方がずっと簡潔で明瞭である。

二十世紀における中国の翻訳論は厳復の「信達雅」（偽りのないこと・意を尽くしているこ

と・表現が優雅であること）に始まる。その後国家存亡の危機に際し、文を以て国を救おうとした魯迅は、「硬訳・寧信而不順」（「直訳・すらすら読めることよりも寧ろ忠実であること」）を主張、中国語自体の持つ「欠陥」と翻訳における自国文化中心主義を指摘した。これに対し、梁実秋、趙景深、胡適らは翻訳の普及のためには「寧錯而務順」（多少間違いがあってもすらすら読める訳が重要）と反駁し、翻訳論争に発展した。しかしながら、「信達雅」という考えは今日もなお翻訳および通訳の基準として広く用いられている。このような基準を持って例の「羅生門」の冒頭の漢訳に対して強いて評価するなら、魏訳と高訳は「信達雅」の基本的な水準に達しており、おおむね正確な訳文であると思われる。

原文2：羅生門が朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人ありそうなものである。（P7）

魯訳：这罗生门，既然在朱雀大路上，则这男子之外，总还该有两三个避雨的市女笠和揉乌帽子[1]的。（P233）

楼訳：罗生门正在朱雀大路，本该有几个戴女笠和乌软帽的男女行人，到这儿来避雨。（P1）

呂訳：罗生门既然位于朱雀大路，除了这个仆人，总还应该有两三个避雨的戴市女笠[1]或软乌帽[2]的庶民。（P9）

聶訳：罗生门位于朱雀大街尽头，除了这个仆人，按理还应该有三五几个避雨的戴市女笠[1]或揉乌帽子[2]的庶民。（P2）

文訳：罗生门既然位于朱雀大路，这个男子而外，按说还会有两三个避雨的戴市女笠[1]或软乌帽子[2]的人。（P12）

魏訳：罗生门位于朱雀大道。路上三三两两尚有几人。有的头戴仕女斗笠，有的顶着揉乌礼帽。（P29）

林訳：其实这罗生门位于朱雀大路，按理，除他以外，也该有两三个头戴高斗笠或三角软帽的避雨男女。（P1）

傅訳：按说罗生门位于朱雀大街之上，来这避雨的还应该有两三个头戴竹斗笠或乌帽子的男女才对。（P3）

高訳：罗生门正对着朱雀大街，本该有三两戴女笠或软纱帽的行人来此避雨。（P001）

原文の「市女笠や揉烏帽子」に対し、訳者の訳し方には二種が見られる。ひとつは、魯迅訳を初めとする注を付ける「異化」の方法で、この方法により原文の持つ文化的要素がそのまま保たれている。もうひとつは、原文の持つ文化的要素を中国の読者が分かる内容に漢訳する「帰化」という方法である。この「帰化」の訳し方には「高斗笠或三角軟帽」（林訳）のような「高い」とか「三角」とか原文にはない訳者個人の想像力によって作り出された訳語もあれば、「女笠和烏軟帽」（楼訳）、「女笠或軟紗帽」（高訳）のような意味の通らない訳語もある。結局、「女笠」とは何物か以前分からぬままである。更に「竹斗笠或烏帽子」となると、「市女笠」の材料が果たして「竹」なのかという問題も生じてくる。厳復の翻訳論の「信達雅」のうち、「信」（偽りのな

いこと）が基本であるため、訳文というのはどうしても偽りが生じないようにするべきものである。よって、中国に無い日本独特のものに対し、原文の漢字のまま使用し、「[1]、[2]」のような注を付けた方が偽りの生じない、より良い訳し方だと思われる。少なくとも、「高斗笠」とか「竹斗笠」とかのような一側面から訳者の思いをこめて、再加工する訳し方より「信」においては問題が生じないだろう。

原文3：右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。（P7-P8）

魯訳：恼着那右颊上发出来的一颗大的面疱，惘惘然的看着雨下。（P234）

楼訳：他手护着右颊上一个大肿疱，茫然地望着潇潇寒雨。（P2）

呂訳：他一方面因为右颊长出的很大的面疱而心情烦恼，另一方面呆呆地眺望着落下的雨。（P10）

聶訳：他一方面因右颊长满痤疮而心情烦忧，一方面呆呆地凝视着灰蒙蒙一片的雨点。（P2）

文訳：他边挂念长在右颊上的那颗大粉刺，边茫然地眺望落雨。（P13）

魏訳：他带着木然的表情瞭望下雨的景象，且轻轻用手摩挲着右侧脸庞上生出的酒疱。（P30）

林訳：百无聊赖地望着雨丝。而右脸颊那颗大大的粉刺又给他增添了几分烦躁。（P2）

傅訳：佃农的右脸上生着一个很大的粉刺，他一边忍受着隐隐的痛楚，一边茫然地凝视着飘落的雨水。（P3）

高訳：一边扣拾着右脸上刚刚冒出的疖子，一边茫然望着外面飘落的雨丝。（P001）

原文の「大きな面皰を気にしながら」という部分に対して如何に漢訳すれば、釈然とするのだろう。魯訳と呂訳に見られるように、原文の「面皰」という語をそのまま借用したら、日本語と中国語のこの場の意味がほぼ同じなので、別に翻訳上の問題は生じないが、漢語の「面皰」がやや硬くて書面語的にすぎるため、一般読者にとって理解するのに場合によっては辞書か何かを頼りにするよりほかはない。魯迅訳によく見られる傾向として日本語原語のそのままの借用が挙げられるが、特に魯迅訳だけにこういった問題が存在するのではなく、中国に於ける日本語学習者全体によく見られる日文漢訳の際に発生しやすい問題である。漢字を用いて表記される中国語と日本語は、翻訳の場合、辞書などをひく手間から解放される一方、とんでもない落とし穴に陥りやすい「諸刃の剣」のような存在である。ここで、「面皰」よりもっと一般的な語彙として定着している「粉刺」の方がより良い効果が出てくる。「大きな面皰」が「腫れている」ならば楼訳の「大腫皰」が当然考えられるが、魏訳の「酒皰」とは明確さに欠けた表現で、それよりも「酒刺」で訳す方が良いのではなかろうか。確かに翻訳の良し悪しはその訳者の外国語の出来具合によらず、母語の能力による。「酒皰」のような日常的にあまり使用しない表現を用いていては、読者にとって多少難解、一種の晦渋を感じるに相違ない。また、聶訳の「痤疮」とは医学専門用語で、若干硬くてもまだ読者の理解できる範囲内にあるが、「長満痤疮」となると誤訳となってしまう。「長満」とは「顔一面に生じる」意味なので、明らかに原文の持つ意味とは違う。高訳の「疖子」も医学用語に近い表現で、「信」に於いては全く問題が生じないが、その前の動詞扱いとして「扣

拾」というのは中国の「普通話」（標準語）には無い語彙で、中国北方中原地方にある河南省の訛りに見られる「扣拾手機」（携帯弄り）のような例と似ている使い方で、基本的には晦渋で難解な訳語である。

翻訳に於いては長い間にわたって「直訳」か「意訳」かに苦しめられている訳者が多数いる。楼訳の「手護」や傅訳の「忍受痛楚」は明白に意訳で、しかも意訳の「度」が大きすぎ、原文にないものまで訳しており、訳者の二次再創作としか言いようがない。翻訳の過程の於いては、読者に容易に原文作者の真なる意図を分からせるに、なるべく小さな努力を払い、最上の言語効果を図るべきであろう。

ここで、「ぼんやり」という副詞を訳す際、それぞれ「惘惘然」、「木然」、「呆呆地」（二訳者）、「茫然」（三訳者）、「百無聊頼」と漢訳したが、四字熟語の「百無聊頼」（林訳）の方が原文の持つ味を訳者が得意とする端麗な語の使用によって更に「雅」の境界に昇華したとも言える良い訳語であるが、その後の「增添了几分煩躁」となると、原文には無い明らかな訳者の意訳と言える。

「雨の降るのを眺めていた」というところでは、「看着雨下」という「信」や「達」に達した魯訳もあれば、「眺望着落下的雨」（呂訳）、「眺望落雨」（文訳）、「瞭望下雨」（魏訳）というような訳出も見られる。「眺望」にしても「瞭望」にしても基本的には「遠方へ向かって見る」という意からこの場の下人と雨との距離感とはあまり符合しない訳語と言える。これに対し、「凝視着雨点」（聶訳）と「凝視着雨水」（傅訳）に使用された「凝視」とは原文の「眺める」の意を巧みに表現し、下人の心情をも表した訳語である。「望着寒雨」（楼訳）と「望着雨丝」（林訳）（高訳）とは巧妙な訳語処理で魯迅訳とはほぼ同じ効果が出ている。原文の「雨」の一字に対して「潇潇寒雨」（楼訳）に見られるように、擬声語でよく雨を修飾する「潇潇」という極めて良い訳語を使用したり、「雨丝」（林訳）、「漂落的雨水」（傅訳）、「漂落的雨丝」（高訳）のような端麗な修飾語や原文に無い華麗な修飾語を付けたりして「雅」の境界に達しようとする訳者の思いが直に伝わってくる。

原文4：それから、大儀そうに立ち上がった。（P8）

魯訳：于是懒懒的站了起来。（P235）

楼訳：又大模大样地站起来。（P2）

呂訳：接着疲惫地站了起来。（P11）

聶訳：接着疲乏地站起身来。（P3）

文訳：随后很吃力似的站起来。（P14）

魏訳：尔后无精打采地站起身。（P30）

林訳：很是艰难地站起身来。（P3）

傅訳：而后有气无力地站起身来。（P5）

高訳：有气无力的站了起来。（P003）

この文の焦点となっている「大儀そう」に対して、魯訳の「懒懒的」及び楼訳の「大模大样地」

はいずれも誤訳と言わざるを得ない。「大儀」という語は「やっかいなこと。また、そのさま。おっくう。めんどう。」の意を持っているために例のように訳しているが、それ以外に「疲労などのため何もする気になれないこと。また、そのさま。」という意があり、両訳者は共にこの意味を見逃してしまっている。これは両訳者の日本語能力の問題ではなく、あまり読者の読みを考慮せずに、ただ翻訳のために翻訳されたものか、又は出版の事情などによって一度訳してからあまり綿密に吟味、考慮せずそのまま出したのかもしれない。その後の呂訳の「疲惫」、聶訳の「疲乏」、文訳の「很喫力」は、ほぼ原文の意味を忠実に表し、簡潔な訳語を用い、漢訳し「信」から「達」に至っている。更に、魏訳の「無精打采」、林訳の「很是艱難」、傅訳や高訳の「有気無力」のように訳語の選択には吟味に吟味が重ねられ、「達」に留まらず、何とかして「雅」の領域に到達せんという訳者の苦心が窺える。

原文5：楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰である。（P9）

魯訳：从楼上漏下来的火光，微微的照着这男人的右颊，就是那短须中间生了一颗红肿化脓的面疱的颊。（P235）

楼訳：楼上漏下火光，隐约照见这人的右脸，短胡子中长着一个红肿化脓的面疱。（P3）

呂訳：从城楼照射下来的火光，模糊地照出这个男人的右颊。这是一张短须中长着红肿化脓的面疱的脸颊。（P11）

聶訳：从城楼上照射下来的火光，模模糊糊地照出这个男人的右颊。这是一张短短的胡须中间长着火红一片、已化了脓的痤疮的脸颊。（P3）

文訳：从门楼上照射下来的火光，依稀浸润了此人的右颊。颊上，胡碴当中长了一颗红红的灌了脓的粉刺。（P15）

魏訳：楼上泻露的火光，令男子右侧的脸庞微微濡湿。短硬颚须的脸庞上，泛现出面疱红色的脓疡。（P31）

林訳：上面射下的火光，隐隐约约舔着他右侧的脸颊，映出短短的胡须和红肿的酒刺。（P3-P4）

傅訳：楼上映出的微弱火光照射在他后侧的面颊上，并且正是透过他的短发可见那红肿粉刺的一侧。（P7）

高訳：楼上透出的火光，隐约照见男人的右颊，短短的胡茬里，可巧看见那个红肿的疖子。（P003）

この訳文では、明らかに魯迅訳に首肯できぬ「硬訳」が窺われる。魯迅が自らの「硬訳」について、1930年に出版された『文芸と批評』の後記で、次のように書いている。「但因为译者的能力不够和中国文本来的缺点，译完一看，晦涩，甚而至于难解之处也真多；倘将仂句拆下来呢，又失了原来的精悍的语气。在我，是除了还是这样的硬译之外，只有‘束手’这一条路——就是所谓‘没有出路’———了，所余的惟一的希望，只在读者还肯硬着头皮看下去而已。」【注】（訳者の能力不足と、中国語本来の欠陥から、訳し終えて読んでみると文章が晦渋で難解のところすらまことに多い、複合句をばらばらにすればそれでは原文の語気が失われる。私としては、やっぱりこのよ

うな硬訳をするしかしかたがない、でなかったら翻訳をあきらめるほかない。残されただひとつの希望は、読者がただ我慢して読んでいってくれることだけである。）

ここに於ける魯迅訳も紛れもなく「硬訳」で、晦渋難解とまでは言えないものの、原文の構文そのまま踏襲し、如何なる調整も施さなければ、漢訳した文は中国人の閲読習慣に符合せず、読み続けると違和感を生じてくる。後の呂訳も聶訳も語の選択は魯迅訳より豊富かつ適切であり、魯迅訳よりいくらか読みやすくなるが、全体的には魯迅訳の影響を受けているかのように見える。一方の楼訳は訳文の前半が魯迅訳とほぼ同じであるが、後半では「硬訳」せずに、中国語の表現方法や構文の接続などを考慮し、すらすらと流暢に読ませるために訳されている。後の文訳、魏訳、林訳が後半にはいずれも楼訳を彷彿させる訳文で、楼訳の影響を少なからず受けているように見えるが、語の選択においては遥かに楼訳を超えている。例えば、魏訳の中の「泻露」、「濡湿」、「短硬颚須」、「泛現」などはいずれも選択に選択を重ね、吟味に吟味を重ねた結果と言える。林訳の「舔」という用語は明らかに原文の「ぬらす」には合わず、意訳し過ぎた所為で本来の「信」、「達」の道から完全に逸脱してしまったとは言える。傅訳に関してはこの点に気付いたようであるが、残念ながら「鬚」を「短髪」と誤訳してしまったのである。この箇所の高訳は四句の字数の均衡が取れている短文にそれぞれ分けられ、簡潔で一読すると余韻が残る。

4. まとめ

魯迅訳は1921年6月14日から17日にかけて北京の『晨報副刊』に掲載された。楼訳については楼適夷が『芥川龍之介小説十一篇』の「書後」で語っているように1976年の4月から6月にかけて「羅生門」を含めた芥川の十一の短編として漢訳したものである。言い換えれば、「羅生門」の漢訳が魯迅の手によってから半世紀もの歳月が過ぎた後再び楼適夷に漢訳されたと言ってもよいものである。20世紀の中国に於ける偉大なる小説家、翻訳家、また思想家である魯迅の和文漢訳に関しては「直訳」、乃至「硬訳」が多いとか、日本語語彙の直接借用とかいう問題が挙げられるが、「羅生門」が1915年出版されてから僅か六年が経たないうちに、「硬訳」とは言え、魯迅の手によって漢訳され、近代日本文学作品の漢訳の第一人者として果たした役割や現代中国文学におよぼした影響などを考え合わせると、魯迅訳の功績がかけがえのないものと言うのはけっして過言ではない。日本近代文学作品の和文漢訳に於いて「早期」と言えるその訳作はその後の訳者に間違いなく多大な影響を与えたのである。

20世紀80年代から今世紀初にかけて、楼訳、呂訳、文訳に代表される「中期」訳文は、改革開放が開始され、訳者の「表現欲」を束縛するものが徐々に緩和されつつあるとともに、参照訳としての魯迅訳もあるなかにおいて、一般読者に分かりやすく読ませる、受け止めてもらうための訳文、訳語に工夫を払い始め、より正確で、簡潔な訳文を追求した。このうち、「老翻訳家」と尊称されている楼適夷は1950年代に早くも志賀直哉作品、小林多喜二作品の漢訳、1960年代井上靖作品の漢訳など多数の作品の漢訳に努め、和文漢訳界に於いて継往開来の重要な翻訳家である。

しかしながら、1980年代当時の中国国内情勢、思想などの影響を受け、作者以上に自由に表現しようとする訳者に往々に見られる「表現欲」は楼適夷の訳文に於いては、「潇潇寒雨」のような後輩に負けない良い訳語も見られるが、全体的に言えば少数に留まっている。

更に魏訳、林訳、高訳に代表される「近期」訳文に至っては、「早期」から「中期」にかけての先輩者らの訳文が何種類もあり、参照の用に充分供されてきた。社会もすでに訳者の表現欲に任せきった感じで進歩し、更に市場経済の波に乗り、出版社の販路打開の方針に従い、「信」の基本を保ちつつ、読者獲得するには「達」から更に格調の高い「雅」を追及し、そのために、語の選択のこだわりより「端麗」から「華麗」なる語彙へと、直訳から意訳へと訳者の二次創作の跡が随所に見られる。また場合によって「雅」の「高齢の花」を採るために、原文に全く無い、原文の意を遥かに超えた無節制な意訳へと試みた揚げ句、逆に誤訳が生じ、基本の「信」も失われてしまう訳文さえ出ている。

魯迅を含めた九人もの訳者の「羅生門」漢訳にあたり、顕著な共通点が見られる。即ち「羅生門」のみ漢訳したのではなく、芥川の他の短編をも幾つか漢訳し、それを一冊の「小説集」や「小説選」にまとめているというやり方である。日本近代文学作品の内、芥川の短編小説が他の作家のそれと比べると圧倒的に存在感、知名度があることと、短編の書き手としての芥川の短編傑作が短いながらも、上品な言葉、きめが細かい心理描写、巧妙な分布などといった特色があるため、これまで幾度も外国語翻訳の対象となっている。上述した他の訳者の内、管見のところ、聶双武と傅羽弘以外は、いずれも日本文学研究界、翻訳界に於ける「著名人」で、その和文漢訳界に於ける「著名人」の主な「訳作」と言えば、かの魯迅も訳したことのある「羅生門」を含めた芥川の短編小説である。即ち、中国の和文漢訳界に於いて、芥川短編小説の漢訳が一つの頂点、一種の名誉のようなもの、翻訳力の最高レベルに到達したと様々な角度から看做されたが故に「青は藍より出でて藍より青し」の如く、魯迅を除く八人もの訳者が九十年間、同じ「羅生門」に対し、漢訳を行い続けてきたのである。これからも和文漢訳界の頂点に立つために更に「羅生門」を含めた芥川短編作品の漢訳がなされていくものと思われる。

現在、九種の訳文の内、林訳即ち林少華の訳文が中国国内に於いて最も取り沙汰されている。「林氏訳文が最も代表性を有している」や「林氏訳文はその影響が最も大きい」などと言った評価が論文に見られる。林少華が村上春樹の代表作『ノルウェイの森』の漢訳で一躍有名になった後、漱石や芥川や川端など中国に於ける人気のある日本作家の代表作を相次いで漢訳し、著名翻訳家の称号を獲得した。語の選択の豊富さ、語彙処理の巧みさ、表現の洗練、流暢さなどといった林少華の漢訳文の特色がそのような成果を実らせたのである。一方、「雅」への追求のための意訳を「ふんだんに」施した結果、「成語の濫用」、「誤訳が多い」、「原文に無い訳者再創作の部分が多い」など否定的な声も聞こえるが、現代人の読書の感覚に何とかして合わせようとする漢訳文は依然として幅広い層に於いて人気を博し、現代の和文漢訳を前へと大いに推し進めてきた功績は甚だ大きいと言える。

これまで「羅生門」の九種の訳文をめぐって相互比較をしつつ、訳文に対する分析や批評を展開してきたが、まだまだ初歩的な段階にある。今後の課題としては、もっと詳細に相互比較し、「初期」、「中期」、「近期」の訳文の間に存在すると考えられる具体的な影響関係をより明確にしていきたい。

【注】

鲁　迅（1995）.《鲁迅全集（第17卷）》 文艺与批评　译者附记. 人民文学出版社.

【参考文献】

芥川龍之介（1969）.『日本文学全集10』 芥川龍之介. 新潮社.
鲁　迅（1923）.《现代日本小说集》. 上海商务印书馆.
楼适夷（1980）.《芥川龙之介小说十一篇》. 湖南人民出版社.
吕元明（1981）.《芥川龙之介小说选》. 人民文学出版社.
聂双武（1998）.《芥川龙之介短篇小说选》. 湖南文艺出版社.
文洁若（2003）.《罗生门》. 华夏出版社.
魏大海（2005）.《芥川龙之介全集》. 山东文艺出版社.
林少华（2008）.《罗生门》. 上海译文出版社.
傅羽弘（2009）.《罗生门》. 吉林大学出版社.
高慧勤（2012）.《芥川龙之介短篇小说选》. 漓江出版社.
鲁　迅（1973）.《鲁迅全集》. 人民文学出版社.
何家蓉（2009）.《‘罗生门’鲁迅译文探析》.《解放军外国语学院学报》第32卷第3期.
孙立春（2010）.《从‘罗生门’的翻译看中国文学与翻译文学的关系》.《日语学习与研究》第6期
袁晓艳（2011）.《‘罗生门’四种中译本之比较》.《郑州航空工业管理学院学报》（社会科学版）第30卷第5期.
吴　婷、庹丽珍（2013）.《‘罗生门’的翻译文本比较——以鲁迅和楼适夷的译本为例》.《科技信息》第6期.